【1用　語】

【端午：たんご】五節句の一つ。江戸時代以降、男子の節句とされ、陰暦五月五日に武家では甲冑・幟を飾り、柏餅などを食して祝った。

【帷子：かたびら】裏を付けない衣服、生糸や麻絹で織り仕立てた単衣（ひとえ）

【単物：ひとえもの】裏地を付けない一重の和服

【思食：おぼしめす】「思し召す」とも書く。「思い」「考え」の尊敬語。お気持ち、お思い、お考え

【委曲：いきょく】詳しく細かなこと、委細、詳細

【1解　説】

「御内書」（ごないしょ）とは、将軍家が発給した書状形式の文書のことである。一般には黒印が押され、季節の挨拶（端午・重陽・歳暮など）や贈り物に対する返礼などに使われることが多く、形式的には私文書とされるが、公的な性格をもっていた。

本文書は、土岐頼稔（よりとし）が将軍家に贈った端午の節句祝い（帷子）に対して、八代将軍の徳川吉宗が老中の松平乗邑（のりさと、下総国佐倉藩主）を通して出された返礼状である。

「御内書」は一般に年号を記載しないが、吉宗が将軍職、土岐頼稔が侍従、松平乗邑が老中職にあった時期から絞り込むと、享保二十年（一七三五）から延享元年（一七四四）までの間に出されたと推定される。頼稔が京都所司代に就任し、沼田藩の初代藩主の時期にあたることがわかる。なお、宛名の敬称は格式によって「とのへ」（薄礼）と「殿」（厚礼）が使い分けられた。